保守・改革」なお暗闘も　鄧氏と楊氏確執　読売新聞」-1989.11.10

『読売新聞』1989年11月10日

鄧小平氏の歩み

改革、開放路線で本領

世界を驚かせた一九八九年六月の「血の日曜日」の大衆運動弾圧に示された通り、「共産党の支配」については譲らぬ筋金入り。だが、経済政策、統一戦線工作では教条、建前より実効を重んじる政治家だ。

毛沢東時代の一九六〇年代初め、「大躍進」運動の行き過ぎと災害で農業が破滅にひんし、千五百万人も[illegible]餓死者を出したことがある。当時、「白ネコでも黒ネコでもネズミを捕るのが良いネコ」という故郷・四川の言い伝えを演説で示し、劉少奇（国家主席）とともに農家に自留地を認めるなどの政策転換を打ち出して、急務だった生産の回復を見事に実現した。

この本領は、中国の目指す課題設定に当たっても発揮され、八〇年正月、①世界平和維持②祖国統一③経済建設の三つを八〇年代の三大課題として挙げた。

平和な国際環境の中で経済を発展させ、台湾、香港の祖国統一を実現しようという〝三位一体〟の手堅い方法だった。

七八年十二月の中共中央委員会総会。鄧小平は改革と対外開放の新路線を打ち出し、周恩来が死ぬ前年の七五年に提起していた「四つの近代化」を改めて国家目標に掲げ直した。

農業の戸別請負制実施と人民公社解体、個人経営の大幅許容。さらには外国資本を導入した合弁、外資企業設立と〝現代の租界〟経済特別区開設。

中国のイメージを一新するこれらの政策が打ち出された七九年、成果が顕著になった八五年の二度、鄧小平は米週刊誌「タイム」の〝年男〟に選ばれた。

しかし、改革・開放路線が浸透した一九八五年ごろから、食糧生産の低下、価格政策の不手際による物価騰貴、「官倒」（役人ブローカー）という新語まで生んだ党・政府幹部の不正、腐敗が中国を揺るがした。

この暮らしにくさに対する市民の不満、怒りは、開放路線で強まった学生、知識人の政治的自由、民主化要求の声と結び付き、八九年四月、胡耀邦元党総書記の死去をきっかけに新中国始まって以来の百万人デモに発展した。

「皇帝の称号なき皇帝」という痛烈な批判、「―死んでいいはずの人が生きながらえている」との皮肉が登場、毛沢東時代最後の七六年の第一次天安門事件当時、小ビン（小瓶 小平と同音）を電柱につるして地位の安泰を祈った北京市民が「鄧小平引退」を叫ぶ事態に至った。

同輩の長老が多い党内では、もともと、鄧小平は改革・開放路線は取りながらも、積極派と慎重派のバランサーだった。過去の例では、毛沢東時代からの路線転換を擁護した七八年末の「民主の壁」運動がやがて「第五の近代化」（民主化）を掲げると、鄧小平は七九年三月、共産党の指導など「四原則」を打ち出してタガをはめた。このあたりは、かつて五七年に反右派闘争を取り仕切った鄧小平の思想的本領を示したものだ。

自ら後継者に想定していた胡耀邦、趙紫陽二人を「ブルジョア自由化」対策が手ぬるいとして更迭せざるを得なかったのはその見本といえよう。この出来事は、政治面では伝統的共産主義の一党独裁を維持しながら、経済面では資本主義的な利潤追求を認め、奨励するという鄧小平の綱渡り的な政経分離策がもともと内包していた矛盾をあらわにしたものだった。

革命第一世代として、鄧小平は党・政・軍の権力を掌握して中国の「中興」の道を示し、八七年以降は、党政治局に役職のない「最高指導者」として君臨した。その鄧小平が第一線から退いた今、中国はいよいよ〝ポスト鄧〟への航海に乗り出す。

（文中敬称略）

丹藤佳紀・前北京支局長

鄧氏の書簡内容

【RP 東京】九日の北京放送によると、鄧小平氏が十一月七日に中国共産党政治局あてに送った党中央軍事委主席辞任に関する書簡の内容は次の通り。

一、江沢民同志をはじめとする指導的中核はすでに卓越した成果をあげながら、活動を展開している。

一、慎重に考慮したあと、私は健康なうちに、現在の職務を辞任し、願いを実現しようと思っている。

一、共産主義事業、国家の独立、統一、建設、改革事業のために、数十年来奮闘してきた一人の古参党員、古参公民として、私の生命は共産党のものであり、国家のものである。

一、辞任した後も、私は共産党と国家の事業に忠誠を尽くす決意である。

闘も

中国専門家座談会

「中国の最高指導者」と形容された鄧小平氏（八五）が、党中央軍事委員会のポストからついに退いた。鄧氏は、第一線を離れてもその強い個性で中国の針路に影響を及ぼして行きそうだが、天安門事件後に党総書記に抜てきされたばかりの江沢民氏がその後任として党・軍の大権をしっかり掌握できるのかどうか――など中国の抱える問題は数多い。読売新聞社は九日夜、中国の政治、軍事および国際関係に明るい専門家三氏による座談会を開き、これらの問題について分析してもらった。

（文中敬称略）

出席者

中嶋　嶺雄氏（東京外語大教授）
平松　茂雄氏（杏林大教授）
国分　良成氏（慶応大助教授）
司会　阿部義正本社編集局総務

――中央軍事委員会主席を辞任した鄧小平は、今後、院政を敷くのか、完全に引退するのか。

中嶋　鄧小平に重要事項に関する決定をゆだねた一

ない。完全引退というわけにはいかないだろう。

平松　鄧小平が健在なうちに、しかるべき人物に譲りたいと強引に行った人事だろう。だから、引退して

――楊尚昆、楊白冰の兄弟が、それぞれ第一副主席と秘書長に就任したが、楊兄弟の登場をどう見るか。

平松　鄧小平は初め、胡耀邦を後継者に考え、次に

軍事委主席になったものの、軍での基盤がない。実際には楊尚昆が掌握する古い体質の軍がのさばり、保守派が発言力を強めている。その流れからすると、改革派の秦基偉らが出てこないのもうなずける。

国分　今回の人事は、強硬派が主流のように見えな

尚昆が軍事委主席を狙っているとは思わなかったが、その後の動きを見るとそうとしか思えない。天安門事件後、軍機関紙「解放軍報」にだれの名前が多く出てくるかと言うと楊白冰だ。楊白冰が総政治部主任で、総政治部が「解放軍報」を編集しているから、偏りがあることは前提として考えなければならないが、とにかく一番よく名前が出る。その次が楊尚昆の娘婿の遅浩田（総参謀長）だ。秦基偉も出てくるが、儀礼的な活動に限られている。江沢民の名はたまにしか出ない。

国も含めた外国との関係での孤立化、改革の大幅後退③香港、台湾の問題――などだろう。今まで近代化を進めてきた人たちのこうした危機意識と権力のトップの意識とのズレが今、大きな問題になりつつあるという感じがする。

――建国四十周年の年、しかも権力闘争が表面化してきた年に鄧小平が引退するのは皮肉だ。

国分　鄧小平はもともと天安門事件前から、ソ連のゴルバチョフ議長と会って引退するレールが敷かれていた。だが、天安門事件に

革はむずかしい。しかし、その問題を問うのは、江沢民の責任を問うことになる。そこで重要になってくるのが江沢民の指導性で、江沢民は自分に自信がなく、ポストにおびえているように見える。改革の先頭に立ち、胡耀邦、趙紫陽の二の舞いになることを恐れている。これでは、全中国が一丸になって改革・開放を進める体制はできない。

国分　中国では民主化はワン・オブ・ゼム、つまりひとつの問題に過ぎず、いろいろな側面にひずみが出てきている。経済問題は今後ネックとなる感じがする。余剰労働力は一億数千万と言われ、失業が増える中で、この人口をどう吸収していくのか。中国では「農村で問題が起きると山が動く」と言われる。現在、農村経済はおかしくなって来ており、（党指導部は）権力闘争などやっていいのか、という感じがしてくる。人口は大幅な伸びを示しており、今後、この問題が中国にとって一層深刻なものになるだろう。

――東欧を中心とした改革の動きに中国は逆行していないか。

中嶋　東欧の動きは後戻り出来ない構造的変化だが、中国の場合は、天安門事件がなくても引き締めに動く傾向が出ていた。ソ連・東欧の改革がインパクト

「保守・改革」なお暗

鄧氏と楊氏確執
江氏、軍掌握カギ
新体制は過渡的

中嶋　平松　国分

昨年の党中央委総会の秘密決議が依然生きているとすれば、鄧小平が中央軍事委主席のポストを退いても、依然として政治的影響力を行使すると思う。天安門事件であれほどの犠牲と代償を払ったにもかかわらず、党政治局常務委員会には、李鵬、喬石、姚依林ら強硬な意見を言う人たちと、江沢民、李瑞環、宋平ら、戒厳体制をできるだけ早く解き、趙紫陽の処罰もできるだけ穏便に済まそうという人たちとの間に亀裂が目立っており、政治局が二つに割れているように見える。これでは鄧小平が後ろでコントロールしなければいけ

（左から）中嶋東外大教授、平松杏林大教授、国分慶大助教授（手前は阿部・本社編集局総務）

も後ろでコントロールせざるを得ないだろう。

国分　私も同意見だ。ではなぜ今かというと、今のうちに譲らないと、後継者の江沢民が権力を固める時間的余裕がないからだ。

趙紫陽を考えたが、いずれも失敗した。いずれも、時間をかけて根回しをし、かえって様々な問題を生んでしまった。今度は、そういう根回しをやらずに強引にやってしまったという印象が強い。ただ、強引にやったことで、当然反作用が出てくるだろう。鄧小平は楊尚昆と一種の相討ちの形で引退すると私は見ていた。ところが、楊尚昆は残り、楊白冰も秘書長になった。劉華清を楊尚昆のけん制役に抜てきしているが、楊兄弟、少なくとも兄を引退させることができなかった。楊白冰が政治局員になれるかが、これから楊尚昆の力を試す重要な要素になると思う。

中嶋　米国のCIA長官が言っていたように、軍権をめぐり、鄧小平と楊尚昆の間にはかなりの確執があったと思われる。江沢民は

がら、基本的には妥協人事である。江沢民を後継者に据える代わりに、楊尚昆を第一副主席にし、弟の楊白冰を秘書長に据えた。天安門事件以降、党内に社会主義建設の方法をめぐってし烈な闘争が起き始めている。同時に天安門事件の責任のなすりつけ合いも出てきている。鄧小平はその中で、バランサーの役割を担っていた。そうした党内の不安定な状況は今も変わっていない。

―― 江沢民体制の安定度は。

平松　今回の出来事は楊尚昆が権力欲をむき出しにしたこと以外の何ものでもないと思う。天安門事件も権力闘争だった。つまり、楊尚昆が中央軍事委主席になろうという意図があったわけで、それが現在も続いているということだ。天安門事件の時には、まさか楊

これなどからみても、軍が（江沢民を）支持しているとはとても思えない。

国分　今の権力構造をみてみると、最高指導部はかなり保守的強硬派が占めている。ただ、その下の中央委員会とか、国務院の閣僚クラスになると、改革を支えてきた人たちがそのまま残っている。問題はこういう人たちの支持をどう取り込んでいくかだ。江沢民が今、自分の権力を固めるためには、一つは軍、もう一つはこの改革を進めてきた人々に力を及ぼしていかざるを得ないと思う。改革を進めてきた人々の間には今の状況に対する焦りがある。もしこのまま強権的な政治が続けば、犠牲がますます大きくなるという気持ちだ。犠牲とは、①過去十年の近代化の全面否定②西側諸国だけでなく、社会主義をめぐり揺れ動く東側諸

よって、近代化の功労者として勇退するという本来のシナリオが崩れ、きわめて不幸な形で引退せざるを得なくなった。だから、鄧小平は安心して引退できるというよりは、今後も（党指導部を）後ろから支えていかざるを得ないと思う。毛沢東を引き継いだ鄧小平は十年間、経済の近代化を行ってきた。だが、その延長線上に出て来た人々の意識の変化、政治的豊かさを求めるという必然的流れを理解できなかった。近代化の延長線上に現れてきた事象が理解できず、自らの限界を露呈してしまった。

―― 改革・開放路線は今後変質していくだろうか。

中嶋　当局者は盛んに改革・開放の継続を主張しているが、実際の推進者は追放されてしまった。民主化運動が提起した問題は何一つ解決されておらず、こうした政治的矛盾に目をつぶったままの改革・開放は中身が伴っていない。中国の経済状況も深刻だ。財政危機、外貨不足、対外債務の累積、失業率増大、人口増大などの問題を抱えている。口先では改革・開放を言いながら、一方で知識人の弾圧や新興企業集団の摘発を進める「羊頭狗（く）肉」のようなやり方自体を問題にしない限り、真の改

を与えていることと、同じ中国人社会の台湾や香港が経済の面で活況を呈していることの二つの影響は大きい。この圧力に江沢民体制が耐えられるかどうか。一般民衆はポスト鄧体制に対し、舞台の下から上を見ているような状況であり、天安門事件など内政のツケが（今回の人事で）決着出来るとは思えない。

―― 鄧小平の歴史的評価はどうなるだろうか。

中嶋　鄧小平は「非毛沢東化」を実行した延長線上で、まさに今東欧で進んでいるのと同じ実験を中国でやるはずだったのだが、中国自身がそのシステムになっていなかった。鄧小平自身が古いパターンの人物だったため、八四、八五年以降は自ら毛的な皇帝型の指導者になってしまった。ポスト鄧体制では、逆に鄧小平批判が避けられなくなるだろうと私は見ている。

国分　毛沢東にしても、劉少奇、林彪と後継者を切ってきたが、最後にはいわば中間派の華国鋒を選んだ。江沢民も鄧小平の遺産を引きずっていくわけで、華国鋒のように過渡的な存在になるように思う。

おことわり　連載「40歳の中国」は休みました。